

# 展覧会とアートプロジェクト報告

## Report of an art exhibition and art projects

造形表現学科 山藤 仁

絵画とインスタレーション、アートの社会的機能について行った以下の3つの展覧会及びアートプロジェクトを報告する。

1. 展覧会名：「京都 霾」 Hazing Kyoto Invitational Group Exhibition (北京)
  2. プロジェクト名：「しんゆりマルシェ 2014」(川崎市)
  3. プロジェクト名：The 2nd Bagasbas Beach International Eco Arts Festival (フィリピン)
1. 展覧会名：「京都 霾」は北京の芸術特区で行われた展覧会。芸術特区とは、中国や外国から進出したギャラリーが多く立地し、芸術家のアトリエや住居があり芸術家のコミュニティーが形成されている。近年観光地化され、しばしばニューヨークグリニッジ・ヴィレッジやソーホーと比較される。
  2. プロジェクト名：「しんゆりマルシェ 2014」は、アートと食の祭典をテーマに小田急線新百合ヶ丘駅周辺を利用し大規模に行われるマルシェ。この中でアートを利用し多世代と交流し合うことを目的に行われたアートプロジェクト。
  3. プロジェクト名：The 2nd Bagasbas Beach International Eco Arts Festivalはフィリピン、ダエトで行われた。アートによる地域活性化と福祉、ツーリズムを融合したアートプロジェクト

### 1. 展覧会名：「京都 霾」 Hazing Kyoto Invitational Group Exhibition (北京)

基礎データ

作品名：「画布空間」 Canvas Gallery

サイズ：3890mm × 4010mm × 5160mm

素材：F200号キャンバス 16枚・アクリル・油彩

会場：Star Gallery (Beijing,China)

会場住所：C5 Qikeshu Creative Park No.55 Banjieta Road, Chaoyang District Beijing,China 100016

会期：2014年8月20日～9月5日（9月11日まで延長された。）

アーティスト講演：2009年9月21日・Aスタジオ

主催：Star Gallery (北京)

公式ホームページ：<http://www.stargallery.cn>



展覧会ポスター



Star Gallery (北京)

「京都 霾」Hazing Kyoto Invitational Group Exhibition 概要

中国北京芸術特区七棵樹創意園C5、STAR Galleryにおいて\*「京都霾」Hazing Kyoto Invitational Group Exhibitionのタイトルで行われた。昨今の日中の政治的関係悪化を背景に文化芸術の面に対話するため企画された展覧会。(企画主体はSTAR Gallery) 日中のアーティストが作品を通し文化の共通点を探り、鑑賞者を交えて直接会って対話することで過去も現在も互いが影響し合っている事実を探る。この展覧会には、中国新聞社(新聞掲載記事有り)をはじめ各メディアが取材に訪れ中国文化省が視察に訪れるなど注目された。展覧会会期が2014年8月20日から9月5日までの予定であったが9月11日まで延長されることとなった。(\*「京都霾」の京都とは中国語で都市の意。霾とは霧とPM2.5を示す。)



(「画布空間」Canvas Gallery／3890mm×4010mm×5160mm／F200号キャンバス16枚・アクリル・油彩)

作品展示内容

広大な空間を持つSTAR Galleryに入ると、その空間に入ること遮るように壁のような本作品「画布空間」が展示されている。当初のプランで、おおよそこの位置に展示する計画であったが、実際の展示では設置する角度を変更した。作品を制作している段階でキュレーターが、展示空間をこの作品で遮ることによって、作品に対する鑑賞者の驚きを得られることを理由にこの位置への設置を提案され、協議しこの位置に決定した。鑑賞者はギャラリーに入るとこの作品によって行く手を阻まれる。同時にギャラリー壁面と作品の間に、一人が通れる程度の狭い通路がこの作品によって生成される。鑑賞者はこの通路を抜け、全体を見上げることができたときに、これがキャンバスであったことがわかる。F200号キャンバス16枚を使った空間は3890mm×4010mm×5160mmであり、作品内部に入るとキャンバスが壁となって描かれたプリミティブな表現に覆い尽くされる。このことで作品内部空間と外部の空間との感触の違いを感じることができる。ある鑑賞者は、まるで大量の水の浴びせかけられたように感じた感想を述べていた。絵画とは何か、平面とは何かインスタレーションと絵画の関係を問う作品。



(「画布空間」Canvas Gallery／内部／通路部分 写真右)

Star Gallery入口に壁のように作品をインストールする。作品の横を通り抜け、展覧会場に入ることができる。

作品を展開した状況 (部分)



【中国新聞社・展覧会記事】

【中国アートメディアでの紹介】

Scope : mp.weixin.qq.com Hi Art : <http://m.weibo.cn>

ART SPY : <http://www.artspy.com> など。

2. プロジェクト名：「しんゆりマルシェ 2014」(川崎市)



「しんゆりマルシェ」ロゴ

住宅展示場での様子

基礎データ

プロジェクト名：「しんゆりマルシェ 2014」(川崎市)

公式HP：<http://shinyurimarche.jp> (2014年12月現在)

会場：第1会場：小田急線新百合ヶ丘・新百合ヶ丘ハウジングギャラリー

第2会場：ゆりてらす・リリエンス通り (新百合ヶ丘駅南口広場)

会期：2014年10月25日(土) 10:00～16:00

主催：一般財団法人川崎新都心街づくり財団・しんゆりマルシェ実行委員会

企画・運営：東京都市大学

来場者数：約25000人

テーマ：「アートと食の祭典」

「しんゆりマルシェ 2014」全体概要 (公式HPより抜粋)

新百合ヶ丘は、緑の丘陵に囲まれた芸術文化の香る街です。この街をキッズやファミリー、シルバーな

ど、いろんな年齢層の人々が集い、交わり、一日を楽しく過ごせる場所とするため、「しんゆりマルシェ」が開催されます。マルシェは、フランスでは朝市を表す言葉ですが、私たちは、文化的な色彩を強めて、「アートと食」をテーマにしたイベントとして実施いたします。アートとクラフトが並ぶ通りを散策し、ワークショップやプレイランドで時間を過ごし、様々な街角ライブやステージ・ショーに感じ入り、アートの世界をアクティブにお楽しみください。マルシェの本命となる食の世界では、ファーマーズのマーケットやしんゆりキッチンで食べ物を選び、地元の食材や料理人たちの味をお楽しみください。しんゆりマルシェの企画と運営は、多くの大学生の参加で行われます。若い力の結集によって誕生するこのマルシェで、皆さんが楽しい一日を過ごされるのを期待しています。

#### 山藤研究室概要

内容：パラソルによる「しんゆりマルシェ 2014」会場装飾 及び パラソルアートワークショップ

##### 1. パラソルによる会場装飾：

- ・OPA（商業施設）から新百合ヶ丘ハウジングギャラリーまでの歩道装飾
- ・新百合ヶ丘ハウジングギャラリー内パラソルステージ制作

##### 2. パラソルワークショップ概要：

形式：個性指向型・親子参加型アートワークショップ

主体：東京都市大学人間科学部山藤ゼミ学生10名（4年、3名・3年、7名）

内容：主に保育士・幼稚園教諭・小学校教諭を目指す学生達による子どもと子育て世代を対象にしたアートによる教育プログラム。

#### パラソルワークショップコンセプト

日常的に目にする透明なビニール製の100円傘。必要なときに店先に並べられ、簡単に捨てられてゆく。また、心ない人物に盗まれることもある。しかし、あまりに安価なため心痛めることなく傘の存在を忘れてしまう。この100円傘をキャンパスに見立て、子どもたちが自由に描くことによって100円という価値を子どもの力によって無限の価値へ変換しようとする。そして、この傘が街に広がることで自由と可能性に満ちた子どもの存在と、盗むことのできない物に価値を変えた子どもの力をアートプログラムを通して街に発信してゆく。

傘に描く際には、筆だけでなく、マジックやスポンジによる表現技法（スタンピング）や絵の具を垂らす、振りかける技法（ドリッピング）など、様々な表現技法を使う。どれも保育者を目指すための教育スキル、モダンテクニックであり基本的な表現技法である。これらの技法を実際に用いながら作品を制作することによって、より実践的な技術を身につけていく。また、パブリックスペースでの展示は地域住民との交流の機会にもなる。子どものいきいきとした感性や表現を園内だけに留めず、積極的に地域へと発信することができる保育者育成を目指す。



マルシェ全体を学生が描いた傘で覆い、その中で親子が保育者を目指す学生と共に透明ビニール傘に絵を描く。保育所や幼稚園、小学校では制作する時間が限られているが、ここでは子どもたちが納得するまで制作ができる。子どもたちが集中している様子が分かる。学生は子どもの集中を途切れさせないように、子どもとの距離を意識して寄り添う。運営、管理、進行を綿密に計画していたため、予想を超える参加者を混乱なくワークショップへ誘導することができた。



「しんゆりマルシェ」に参画  
多世代が楽しめる空間演出

〈東京都市大学〉

10月25日(土)、小田急線新百合ヶ丘駅周辺地区を会場とした、地域活性化と多世代共生を目的とするイベント「しんゆりマルシェ2014」が開催された。本イベントは、東京都市大学の学生の発案によって実現されたもので、企画・運営や出展などに首都圏8大学の学生100名以上が加わった「しんゆりマルシェ実行委員会」が主催となり実施された。

同大では、都市生活学部がイベント開催に至るまでの取り組みをパネル展示で紹介したほか、透明な傘に絵を描くワークショップを人間科学部児童学科の学生が行い、地域の子供からお年寄りまで多世代が楽しめる空間を演出した。



3. The 2nd Bagasbas Beach International Eco Arts Festival (フィリピン)



The 2nd Bagasbas Beach International Eco Arts Festival ロゴ

基礎データ

場所：Bagasbas Beach, Daet, Republic of the Philippines, Camarines Norte

会期：2008年9月28日～10月5日（現場制作含む）

作品タイトル：The COMMUNITY “For you is for me”

キュレーター：Dr. Patrick D. Flore・Dr. Joaquin G. Palencia

参加作家：Kawayan De Guia/Philippines・Claro Ramirez/Philippines・Mark Salvatus//Philippines

Ashley Thorner/USA・Sara Tse/China・Wire Tuazon/Philippines・Hitoshi Yamafuji/Japan

公式ホームページ：http://www.bbieaf.org

展覧会概要

この Arts Festival はフィリピン、マニラから南南東に直線距離で約250km、車で6時間ほどのところにある CAMERINES NORTE の Daet という都市にある Our Lady of College Foundation (OLLCF) を拠点に Bagasbas Beach で行なわれた。第1回目が2005年で今回2008年が2回目の開催である。

このArts Festivalは、Daetに自生する竹を素材に4カ国7名(USA,China,Philippines,Japan)のアーティストが現地のコミュニティーの協力のもと、サイトスペシフィックな作品をつくり上げることを目的としている。また同時に重要な役割は、このArts Festivalがこの地域の発展に寄与すること、具体的には大学でのレクチャーを通じてアート教育の機会の提供、アーティストの社会福祉への参加等が挙げられる。アーティストが現地の学校や病院に訪問し、アートや文化についてレクチャーをすること。またアーティストが地元の小学校へ給食の配給に協力し、現地の状況を理解することなどアーティストの限られた訪問期間の中で、アーティストの作品制作を通じて現地の人々と社会に可能な限り深い関係を求める新しいかたちのツーリズムとアートの融合がこのBagasbas Beach International Eco Arts Festivalである。尚、The 2nd Bagasbas Beach International Eco Arts FestivalはDaetの展覧会期後にマニラでもドキュメント展を行なう。

### 作品プラン概要

Bagasbas Beach International Eco Arts Festivalの原則的なルールはアーティスト一人に現地に自生している竹50本を素材として提供し作品をつくるという内容である。そして制作には現地のコミュニティーも参加するというものであった。私は絵画の制作と平行し、様々なアートプロジェクトに参加した経験から、コミュニティーの役割と彼らの存在の重要性を強く感じており今回の作品で私はこのアートフェスティバルに参加されるコミュニティーの人々をアーティストの制作手伝いとして関わってもらうのではなく、彼らの持つイメージを主役にした作品の成立が果たせないか検討することにし、これを立案することにした。そのプランドローイングが以下である。このプランドローイングをBagasbas Beach International Eco Arts Festivalに提出するに至った。



完成予想図1



完成予想図2

### 主催者に向けた作品コンセプト

ラスコーやアルタミラの洞窟壁画に観られるように、原始の時代から人にはイメージを持つ力があった。現代の人々もイメージを持っており、これを表出して共有することは絵画の原点に立ち返ることでもある。この作品は制作に参加するコミュニティーのための表現舞台であり、コミュニティーのキャンバスでもある。私はみなさんに会いに行きその場所で「みなさんと集える場所をつくろう」という小さな提案をしたい。その小さな提案をきっかけに、みなさんとコミュニケーションを持ちながらお互いの価値観を尊重し合い、集いの場所をつくってゆこうと思う。私は個人が抱くイメージと、それを共有しあおうとする人たちの「時間と場所」をアーティストとしてつくります。ある人は「椅子やベンチなどが欲しい」というかもしれません。ある人は「日差しをよける屋根が欲しい」というかもしれません。そして誰かが屋根にふさわしい漂着物の青いシートが落ちているのを見つかるかもしれません。このようにお互いの希望や欲求を共有しながら皆が協力し合いつくり上げる。そこには価値観の違いもあるでしょうし、うまく伝えられないこともあるでしょう。しかし同時に個人が抱くイメージを皆が共有しようとする時間がつくれ

るはずですが。個人の意見を受け入れ、みんなで作くりあげること個人欲求がコミュニティーの全体の欲求になることを願っています。個人にとって必要なものとは何か。そしてこのコミュニティーにとって必要なものとは何でしょうか。

この完成予想図は現在私が抱くイメージをまずはみなさんに伝えるためにつくったものです。実際にはこの通りになる必要はありません。限られた50本の竹を有効に使い、そのときビーチに落ちている漂着物を利用してその場でかたちを決定してゆきます。

先にも述べたように、このイメージ（完成予想図1・2）は、まず私のアイデアをみなさんに伝えるものです。このイメージをきっかけにしてみなさんとコミュニケーションを持ちながら、大きさや形が変更されてゆくことが目的でもあるのです。つまり、この作品はオブジェクトではなくコミュニケーションが描く痕跡であるといえます。展覧会会期中も鑑賞する作品として機能するのではなく、観客やコミュニティーの人たち、アーティストたちがここを利用して様々にコミュニケーションをとることのできる場所として機能させます。

### 展覧会開催までの記録

市庁舎での開会式と歓迎式典。

Dr.Joaquin Palenciaの挨拶、各国のアーティスト紹介の後、市長が開会宣言をおこなった。街を挙げアートフェスティバルを盛り上げ、街の人々に協力を呼びかけている。日本でも各地で地域連携型アートフェスティバルがあるが、その規模とバランスを考えさせられる場面であった。



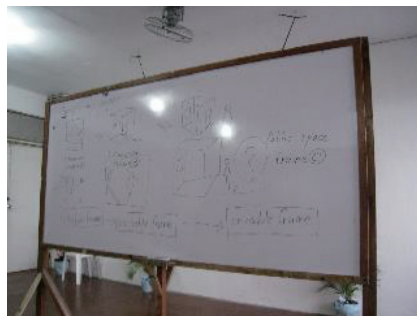
### DaetからMangcawayan島へ

Mangcawayan島の住民とコミュニケーションをとるためDaetから漁船を利用しMangcawayan島に移動する。島まではこの漁船で2時間ほどである。フィリピンは7107の島で構成されている。Mangcawayan島までは定期便もなく郵便すらなかなか届かない現状である。Mangcawayan島に上陸する子どもたちが出迎えてくれた。人口300人ほどの小さな村。電気もガスも水道もない村である。ココナッツの葉で作られた屋根の家屋が点在している。生活に必要な水は一つの井戸からくみ上げ使っている。ここの人たちとアートについて語り合うことになる。



### 学校でのレクチャー

このアートフェスティバルの大きな目的の一つに地域への貢献がある。各アーティストは自分の表現を通してレクチャーを学校で行なった。私もビーチでの制作の合間に学校に行き、レクチャーを行った。聴衆は一般市民を対象としている。ここで私が絵画からインスタレーション、そしてパブリック表現に行き着いた経緯と、それぞれの空間におけるフレームとは何かという内容でレクチャーを行なった。難しい内容であるが学校教育では伝えられない最前線のアートに触れるよい機会でもあるのかもしれない。



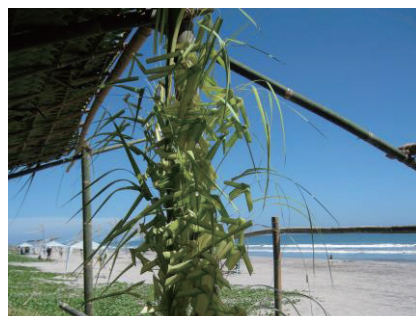
### 小学校へ給食の配給活動を行なう

上記でも述べたように地域への貢献がアーティストに求められる。この一環でDaetにある小学校に各アーティストが給食を配給する活動に参加した。Daetの子どもたちの多くは朝食もとれず給食もないため空腹のあまりに学業に支障が出ている。アートフェスティバルがこのような社会状況に入り込んで行くことの体験は私自身初めてであったが、この子どもたちが作品を見に訪れてくれたときにアートフェスティバルが地域に対してすべきことがあることに気づきこの視点を意識すべきと強く考えるようになった。



### サラサラ

コミュニティーのナナイ（お母さん）たちがこのサラサラをつくりたいと提案した。これは人を歓迎する時に使うフィリピン独特のものらしい。ヤシの一種の葉に切れ目を入れこれを折って不思議なカタチができあがる。まるで植物を使った折り紙のようだ。制作が進むに連れて、この他にも植物を使った様々なアイデアが飛び出してくる。植物が素材として生活に生かされていることがとてもよく分かる体験であった。







### 手書きの旗

作品タイトルの「The COMMUNITY “For you is for me”」の旗をつくろうというアイデアも彼らが発案した。ナナイたちは街にわざわざ出て旗をつくりに行った。布にプリントしてくると聞いて、コンピューターからの出力かと想像していたところ、手書きによるものだった。看板屋さんのようなものだろうか。これも一昔日本でもあったが今はほとんど見かけない。その分この旗がとても新鮮に感じた。サラサラをタイ（お父さん）が海に向けてとめている。徐々に緑から色が黄色くなってゆくのもきれいだった。



### 旗にみんなのサインを入れる

「この作品はみんなの作品である。」このことを伝えて全員のサインをこの旗に入れることを私は提案した。サインを入れるアイデアはただの思いつきではなく、今まで国内外で展覧会を経験してきた中で、フィリピン滞在期間中では特にサインをする機会が多く、この国でのサインの持つアイデンティティーの重要性を感じていた。このような経験からみなさんにサインをするようお願いした。結果的にCOMMUNITYが個人の集まりであることがよくわかるものになった。



オブジェクトなき作品



この作品は、「The COMMUNITY “For you is for me”」というかたちの無い作品である。

The 2nd Bagasbas Beach International Eco Arts Festivalでアーティストとして得るものはとても大きかった。近年のフィリピンは、外資の直接投資も増え始め経済通貨は比較的安定してきているものの、今だ農村部では半数以上が一日1ドル以下の生活を余儀なくされている。これが南部イスラム地域では75パーセント以上になる。このような社会環境でアートが機能するものなのか不安を抱えながらの参加であった。そう考えるのは、私自身の心のどこかで“アートは富裕層のもの”という未だにぬぐい去れない固定観念があったからである。しかし、この固定観念がこのアートフェスティバルによって変化した。今ではむしろアートはこのような現状の中でこそ機能するものではないかという気持ちさえある。

アートは個人的な行為であるという位置づけが一般的であると思うが、この“個人”とは作品をつくるアーティストの立場からの意見がそのまま一般化されたものにすぎないのではないだろうか。本来、作り手と鑑賞者との間に作品を通して生まれる社会コミュニケーションがアートであり、これが人間社会におけるアートの機能ではないだろうか。今回私は鑑賞することを目的とした絵画やオブジェクトとしての作品はあえてつくらなかった。唯一鑑賞することを目的とした物の存在は、記念写真とスナップ写真だけである。これらはMangcawayan島の人々とコミュニケーションをしたことによってもたらされた物である。誰かによって所有され投機目的にされることや、コレクションされる物がアートであるとするならば、『The COMMUNITY “For you is for me”』はアートではないだろう。しかし「創造すること」「思い描くこと」「つくり出すこと」がアートであるならばこれはアートである。滞在記録と制作プロセスで紹介した通り、お互いに創造し描きつくり出し、機能させることの要素をこの作品は満たしている。様々な評価があると思うが、アーティストが物を作るだけの存在ではないこと、そしてアートは本来社会コミュニケーションであるということがこの作品のメッセージである。